外国出身生徒のキャリアパスへの着目
～少数在籍校の中学生を主な対象者として～

Focusing on career pathways of foreign students

-Case studies of junior high school with small number of foreign students-

学籍番号　47-146760
氏　　名　好井壮（Yoshii, So）
指導教員　清水亮 准教授

1. 研究の背景

日本においては 1980 年代あたりから外国人労働者などニューカマーと呼ばれる外国からの移住者が増加しており、近年の移動の特徴として、その国籍の多様化が進んでいることと、定住化が進んでいることが挙げられる。こうした外国人労働者の中には、子どもを伴って渡日する者や子どもを呼び寄せる者も増えており、そうした子どもの中には、日本の学校を卒業し、就職する者も見られるようになった。このような外国出身の子どもは、選択の余地がほとんどないまま渡日し、日本社会の中で自身のキャリアを形成していかなければならない。異国でキャリアを形成していく際には、多くの困難に直面するだろうと予想されるが、そうした子どものキャリアパスに着目した研究は極めて少ないのが現状である。

2. 研究の目的

キャリア形成においては高校の選択が重要になるが、外国出身生徒の高校への進学率は低いという現状がある。中学 3 年生に在籍していた生徒の何%が高校 3 年生に在籍しているかを示した「生存率」という指標を見ると、2008 年の全国統計では、日本人の生存率は 98%だが、外国籍の生徒は 58%だという（バトラー, 2011）。中学 3 年～高校 3 年の間での重要なイベントの一つに高校入試がある。権利として認められている義務教育課程への進学率が極端に低ければ問題として認識されるが、外国出身生徒の高校への進学率は問題にされず、ほとんど注目されない。しかしキャリアの形成において高校の選択と進学は重要であるので、本研究では高校受験前の中学生段階の生徒に焦点を当てる。

「日本語指導が必要な外国人児童生徒」が一定数在籍する学校には、日本語指導を担当する専任教員の加配、「日本語教室」や「国際教室」といった部屋の設置などの措置がとられる。しかし、外国出身生徒少数在籍校では、支援が不足しやすい上に、注目もされづらい。文科省調査（2014）の、在籍人数別学校数をみると、「1 人在籍校」が最も多く、45.8%と約半数を占め、「5 人未満在籍校」が 77.8%と 8 割近くを占め、少数在籍校への着目の重要性が伺える。

よって本研究の目的は、外国出身生徒少数在籍校の中学生を主な対象者として、彼らのキャリアパスへ着目した際に、先ずはどのような困難に直面しているかを明らかにすることである。そして、その困難を克

服する為にどのような支援を行うことができるかを考察する。

3. 対象地選定と研究の方法

本研究の対象地は千葉県 A 市である。A 市には 8 つの公立中学校があり、2016 年 4 月時点では 7 つの中学校に 1 人ずつ外国出身生徒が在籍していた。A 市にはこのような少数在籍校があり、なおかつ外国出身児童・生徒を支援するボランティア団体、すなわち外国出身者の事情に詳しい人が存在する為、本研究の対象地として適しているといえる。よって、A 市において、ボランティア団体へのヒアリング、毎週土曜日の日本語教室や取り出し授業（週に 1 回、在籍学級の授業時間に別の教室にて日本語指導を行うこと）への参与観察等を行った。

4. A 市の外国出身生徒の現状

A 市の外国出身の中学生 7 人の内、3 人は帰国し、残りの 4 人は X 校に進学する確率が高いという状況が明らかになった(表 1)。また、8 つの公立中学校において、日本語指導を受けた生徒の進路を調べると、少なくとも 2012～15 年度に卒業した生徒全員が X 校に進学したことが分かった（表 2)。X 校とは、偏差値で言えば県下で最下位を争う高校である。外国出身生徒にとっての X 校以外の選択肢として、A 市の 2 つ隣の市にある Y 校が挙げられる。Y 校においては、渡日 3 年以内の生徒は外国人枠が利用でき、その入試では漢字にルビがふられる等の措置がなされる。Y 校の偏差値は 50 程度であり、決して難しい高校ではないが、外国出身生徒にとっては合格へのハードルがかなり高い。ウイグル自治区出身の S 君は、日本よりも 1 年くらいカリキュラムが進んでいる母国において平均以上の成績を収めており、日本においても熱心に学業に取り組んでいる。それにも関わらず、3 年生の 12 月に Y 校で受験した模擬テストの結果、志望校の変更を勧められた。よほど優秀でないと Y 校への進学は難しく、外国出身生徒の担任の先生は、彼ら彼女らに、定員割れを起こしている X 校への進学を勧めるというのが定番になっている。

5. X 校への進学は適切か

2014 年の X 校の卒業生 107 名の進路を見ると、私立 4 年生大学が 1 名、私立短期大学が 2 名、専門学校 22 名、就職が 54 名、未定 25 名という状況である。就職する生徒が過半を占めるが、教頭先生によれば、ほ

表1. A市公立中学校の外国出身生徒一覧

学年	在籍校	名前	出身国・地域	母国語	渡日時の学年	母国での成績	これからの進路等の情報
中学1年	a中学校	A君	パキスタン	ウルドゥー語	不明	不明	4月に数回登校した後、帰国
中学2年	b中学校	M君	ケニア	英語	中学1年	不明	中学2年の7月に帰国（登校は数回のみ）
	c中学校	J君	リベリア	英語	小学6年	平均以上	X校に進学予定。
	d中学校	S君	パキスタン	パシュトー語	小学5年	平均以下	X校に進学予定。兄もX校へ通学中。
中学3年	e中学校	Sさん	モンゴル	モンゴル語, 韓国語	中学3年5月	上位1/3以上（韓国の学校）	X校受験予定。将来は多言語を扱うような仕事を希望。
	f中学校	S君	ウイグル自治区	北京語	中学2年６月	平均以上	二次募集でX校受験予定。夢はゲームプログラマー。
	g中学校	W君	中国	北京語	中学2年5月	上位1/4以上	Y校へ向けて勉強したが、統合失調症となり、3年の10月に帰国。

表2. X校の外国出身生徒一覧

学年	出身中学	名前	出身国・地域	母国語	渡日時の学年	母国での成績	これからの進路等の情報
高校1年	c中学校	Mさん	中国	北京語	中学2年	平均くらい	中卒で2年間働いた後X校進学。夢はまだ分からない。
	e中学校	Tさん	中国	北京語	中学3年5月	平均以上	夢はまだ分からないが、進学を希望。
	h中学校	Mさん	フィリピン	タガログ語	中学3年5月	平均くらい	キャビンアテンダントになりたく、進学を希望。
	d中学校	A君	パキスタン	パシュトー語	中学1年	平均くらい	卒業後は父親の中古車輸出業の仕事を手伝う予定。
高校2年	b中学校	J君	フィリピン	タガログ語	小学5年	不明	日本で働きたいと言っていたが、2年の7月に帰国。
高校3年	a中学校	Bさん	フィリピン	タガログ語	中学3年11月	上位1/3以上	日本人継父と喧嘩し、進学の希望が叶わずフリーターの予定。

とんどの場合、就職先は A 市の工場や倉庫であり、その職種は非熟練労働に限定されるという。つまり、X 校に進学した時点で大幅にキャリアの選択肢が限定されるという状況である。

ウイグル自治区出身の S 君は、将来ゲームプログラマーになりたいと考え、大学進学を希望している。モンゴル出身の S さんは、マルチリンガルであることを活かせる仕事に就きたいと考えている。彼女は 5 歳までモンゴルで過ごし、その後は韓国に居住していたので、モンゴル語と韓国語を扱う。さらに自主的にロシア語を勉強しており、大学までは日本の教育を受け、日本語を習得したいと言っている。大学への進学を希望している S 君や S さんにとって、X 校への進学は適切とは言えないが、X 校へ進学する確率が高い状況である。

6. 外国出身者の低学力の理由

6-1 学習言語能力の問題

母国での成績に関らず、外国出身生徒のほとんどが X 校に進学する理由に、学習言語の問題がある。子どもの言語能力は、日常的な会話で使われる「伝達言語能力」と、物事を思考する際などに必要な「学習言語能力」の 2 種類があると言われており、前者は 1,2 年で獲得されるが、後者を獲得するには 5～7 年かかるとされる(Baker, 1993=1996)。母国語の学習言語能力がある程度発達していれば、日本語による教科の理解も進むだろう。しかし彼ら彼女らは、まだ母国語の学習言語能力が発達途上の年齢で渡日しており、渡日以降はその能力の向上が期待できない。よって、第二言語である日本語によって、物事を分析、評価、解釈していかなければならず、漢字にルビがふられたとしても、高校入試においては極めて不利な立場に置かれることになる。

6-2 動機づけの問題

ただでさえ学習日本語の問題によって学習が難しい上に、古文や地理や歴史の分野のように、日本のことを中心に扱う分野においては、そのカリキュラムに適応していくことがさらに難しくなり、外国出身生徒は学習に対する内発的な動機を持ちづらい。また、日本においては学歴がキャリア形成において重要であるという情報を、日本人であれば家族や友人から得られるが、外国出身生徒はそうした情報を得る機会が少なく、勉強に対する外発的な動機も持ちづらい。また、将来の目標が決まっていれば学習への動機づけにつながるが、ロールモデルがほとんどいない外国出身生徒が将来の夢を持つことは難しい。ウイグル自治区出身の S 君やモンゴル出身の S さんは例外的な存在で、ほとんどの生徒は将来について「まだ分からない」と述べている。

7. 考察

外国出身生徒に対してどのような支援が考えられるだろうか。学習言語能力の問題を克服する為には、同国出身者による教科指導の支援の重要性が指摘されている（池上，2009）が、A 市においては同国出身者の絶対数が少ない。さらに、高校入試などに必要な教科指導ができる人材となれば非常に限られる。人材が少ない中、候補者として、ウイグル自治区出身の S 君の姉である K さんが挙げられる。彼女は高校 1 年の 12 月の時に渡日し、3 年生の時に Y 校への 2 度目の編入試験に合格し、同校を卒業した。現在は東京藝術大学入学へ向けて浪人中である。筆者が彼女に支援の相談をした

ところ、彼女は、支援先へは自転車で往復80分かかり、移動の時間とコストを考慮すると支援が難しいと回答した。

唯一、A 市において有力な候補として見つかったのは、土曜日の日本語教室へ通う新小学 1 年生の母親のみである。この母親は日本の大学院への留学経験があり、なおかつ自動車を所有している。この母親の末の子どもは 1 歳であるが、その子守りを日本人ボランティアが担うのなら、統合失調症となり帰国した中国出身の W 君が日本に戻った時、彼を支援する意思があるとの回答を得た。

上記の通り、A 市では同国出身者による支援体制を整えることが難しい。よって、A 市の通常のボランティアができる支援を考えなければならないが、その方法として、動機づけの問題に対する支援が挙げられる。外国出身者はロールモデルが不足しているが故に将来のキャリアについてや、キャリア実現の為に今やるべきことなどを想像しづらい。ボランティアが彼ら彼女らのキャリアについて親身になって考えることが、有効な支援の在り方として考えられるのではないだろうか。パキスタン出身の S 君は、高校の選択がキャリアに与える影響を知らなかった。筆者がその意味を教えた時、今まで将来やりたいことが分からないと言っていたが、その時はじめてエンジニアに興味があると口にした。それまでは、X 校に進学後ほとんど勉強していない兄の影響もあり、勉強に対する意欲は全くなかったが、が、冬休みに筆者に家庭教師を依頼するほど、勉強に対する意欲を見せるようになった。上記のような動機づけに対する支援は、1 つの支援の方法ではあっても、すべての外国出身者に適応できる支援ではないし、仮に生徒の動機づけにつながっても、その動機が継続しない可能性もある。また、こうした支援をする時、忘れてはならないことは、生徒のキャリアパスを共に考えることは、同時にそのことに対する大きな責任が生じるということである。外国出身生徒は日本人の大人と接する機会が少ない為、ボランティアの言葉は彼ら彼女らに大きな影響を与える。それでも現在ボランティアに求められていることは生徒と一緒に漢字ドリルを仕上げる程度のことであり、X 校への進学率がほぼ100%であることは問題意識にすらなっていない現状を考えると、ボランティアが支援に対する責任を背負ってでも生徒のキャリアパスを真剣に考えていく意義はあるだろう。

8. 結論

外国出身生徒のキャリアパスに着目した時、彼ら彼女らが乗り越えなければならない困難を克服することは極めて難しいことが明らかになった。今後、さらなる現状把握の為の調査と、解決策の考察が望まれる。

参考文献

バトラー後藤裕子, 2011 『学習言語とは何か―教科学習に必要な言語能力』pp299

文部科学省,2014『「日本語指導が必要な児童生徒の受入れ状況等に関する調査(平成 26 年度)」の結果について』

Baker, Colin, 1993, Foundations of Bilingual Education and Bilingualism. Clevedon: Multilingual Matters(=1996, 岡秀夫訳『バイリンガル教育と第二言語習得』大修館書店)pp169-170

池上摩希子、末永サンドラ輝美, 2009「群馬県太田市における外国人児童生徒に対する日本語教育の現状と課題―「バイリンガル教員」の役割と母語による支援を考える『早稲田日本語教育学第 4 号』pp15-27